

## 美術学科 FD 研修会報告書 — 成績評価の平準化と前期授業の振り返り —

【日時】 2025 年 9 月 24 日（水） 15:00～16:30

【場所】 美術棟 A214

【進行】 新井      【出席】 権田・堀・本山・和田・大谷・大場

本 FD は、美術学科における成績評価の平準化を目的として実施された。まず、成績の平準化の必要性として以下の 5 点——①公平性の確保、②学習成果の可視化と保証、③学生への適切なフィードバック、④教員組織としての責任、⑤社会的信用——を共有し、それを土台として前期授業の実践や反省を振り返った。次に、美術学科における全授業の S・A・B・C の分布一覧を確認し、他大学の成績分布（秀 10%以内、優 40%以内程度）を参照しつつ、自身の授業を振り返り、課題や改善点について意見交換を行った。

---

【新井】 今年のマンガ 2 年生は作品の未完成がやや目立ち運営に苦勞する場面が多々あった。評価は全体 15 名のうち S は 1～2 名程度を目安とし分布のバランスに配慮した。サブカルチャー論では毎回の授業まとめと感想をかくレポートと記述式の試験で評価した。今年はビジネス実務学科の学生にやや表面的なコメントが多く、美術学科との差があった。全体として S は 1 割、S～A で 4 割程度を目安に評価を行い概ね分布に沿った評価ができた。

【堀】 生成 AI の利用を避けるため、自身の制作や進路に結びつけたテーマ設定を行った。今回はビジネス学科の学生に良いレポートが見られた一方、美術学科の学生は評価が低めであった。全体として B 評価が多く、その要因として、15 回の授業内容を十分に反映できる評価項目がなく、美術館見学レポート 1 本で成績を判定していた点が指摘された。今後は複数の課題を設け、傾斜配分のある成績評価を行う必要がある。

【本山】 デッサンは成果の到達度を示しやすく、評価の妥当性は高いと感じられる。学生の要望を受けて作品評価を公開掲示したところ一定の効果があつたが、C 評価を受けた学生が傷つき個別フォローを要する事例もあり、評価の伝え方には課題が残った。油画・日本画演習 II では S 評価 17%、A 評価 50%となり、約 7 割の学生が高評価を得た。コースの特性上、途中経過も評価対象となるため高評価に偏りやすく、「是正が必要」との意見も出された。今年は頑張った学生が多く、結果として評価がやや甘くなったと振り返られた。

【和田】 コンピュータ表現演習 I では、S38%、A37%と合わせて 75%が高評価となり、B15%、C10%に比べて偏りが見られた。学生の習熟度は二極化しており、基準を未習熟

者に合わせると S・A が増え、テストで基準を調整すると C が F 相当になるという課題がある。導入教育の性格が強い授業であるため、基礎操作を繰り返し学べる仕組みや、習熟度別の導入など検討課題となった。ゲーム・映像演習では描写力に加え、プログラムや 3D など幅広い力が求められ、絵が描けるだけでは S 評価にならない。他コースとの不公平がでないよう評価指標を考慮することも検討する。

【大谷】デザイン演習ではループリックを用い、教員間の採点にばらつきが生じないように配慮している。また、作品の採用など学外における成果については高く評価し、全体としてバランスのとれた成績分布となっている。Web ページ演習はビジネスと美術の合同授業であるがゆえに内容がやや薄くなるが本授業の開設以降、卒業制作などで Web 作品に取り組む学生が増えており、今後の就職にもつながる成果が期待される。

【大場】デザイン論では毎回課題を課し、1 週間以内の提出を原則とした。提出そのものを重視し、提出率と最終レポートをもとに成績を評価した結果、概ね適正な分布となった。授業内でコメント入力を行わせるなどの工夫も行い、授業後のアンケートでは好意的な意見が寄せられた。100 名を超える大規模授業であり一部学生の私語が目立った。席の固定化や人数制限などの対策が必要である。インテリア演習ではグループ制作が多く、独自性を評価しづらかったため S 評価はつけなかった。オーディション以外の成果をどのように評価に反映するかは、今後の検討課題である。

【権田】基礎演習では、学生のバランスを見ながら個性や成長を重視した。全領域での成果が求められ S が出にくかったが、選択コースの成績も反映し調整することで評価の柔軟性が高まった。イラストレーション演習では技能や完成度の差を基準に成績をつけた。学生アンケートでは「心に残る言葉があった」という項目が低くやや残念に思われたが、演習系科目では反映されにくい設問であるとの意見もあった。染色・陶芸コースでは、コミュニケーションが苦手な学生いるが、作品制作においてはそれぞれの持ち味を発揮して成長が見られた。

---

常勤教員は分布を意識するようになったが、非常勤科目では偏りが残った。同科目でもクラスで差が出る例もあり、年度末に口頭で伝えるだけでなく、評価割合の目標を文書で共有する必要がある。公開授業は制度化されておらず、フィードバックも少ない。授業改善につなげるため、取り組みの充実が求められる。以上を踏まえ、次年度に向けて公平で妥当な成績評価に向けた改善を進めることを確認した。